

法華經における仏性思想の内在性

有 賀 要 延

一乗とは仏乗であり、仏乗とは「ブツダとなるための乗物」であると理解する時、かゝる意味を有する一乗は、それが単なる教法である事にとゞまるのではなく、その内容として仏性の理念を内含するものであることを肯定し得るものである。如來は、但、菩薩のみを教化すると説き、声聞、緣覚を一仏乘に収斂せしむる事は、法華經を聞く、という時点において、「仏性の自覚」という転機を暗示するに外ならない。仏典がすべて成仏という点にその最高の目標をにおいて説かれて以上、仏性の内在を肯定していることになるのであるが、思想としての悉有仏性が、必ずしもすべての仏典に表明されていたとは言い得ない、この思想が表面に打ち出されたのが涅槃經である。唯、推定し得ることは、法華經集團の中で此の「悉有仏性」の思想が、法華思想の底流として徐々にその流れを開始していたのではなからうか、という事である。

法華經はその中心思想である一乗について具体的な説明を

行つてはいないが、第二章(方便品)に於て一乗の内容を示す語として、法自性印⁽¹⁾(dharma-svabhava-mudraṅ)寂滅相⁽²⁾(abi-prasāntā)寂滅地⁽³⁾(praśānta-bhūmi)最上寂滅地⁽⁴⁾(uttama-santa-bhūmi)涅槃地⁽⁵⁾(niṣvāna-bhūmi)法の本性⁽⁶⁾(praktiis-dharmāna)法の指導⁽⁷⁾(dharma-nerī)法の常住⁽⁸⁾(dharma-sthit-ī)法の不変性⁽⁹⁾(dharma-niyamataṅ)の九種を挙げることができる。之等は同義の語であり、すべて仏陀の悟りの内容として示されているものである。同章一〇二偈に「これら法の指導(dharma-nerī)は常にあつて變ることなく、法の本性(praktiis-dharmāna)は常に明淨である(sada prabhasvarā)このことを知つて仏陀は一乗を説き明かす」と記されている如く、法の本性明淨なることが述べられている。之は般若經等における心性本淨(praktiis-prabhasvaram cittam)と同系の思想であり、唯心の立場から見れば諸法本淨というも心性本淨というも同じ立場、同一のものとして理解してさしつかえないものである。この心性本淨は又、仏子の思想の中

にも示されているもので、仏口より生じ、法より化生した仏子は意志の成就 (śākyasāmapādyā) と清浄な姿 (vīśuddharūpāya) を達成する資質を与えられ、常に清浄 (vīśuddha) で純粹にして柔和 (śūci śūrata) であることが述べられており¹¹⁾ 仏子の本性明浄なることが示されている。心性本浄は如来蔵思想へ発展すると言われるものであり、仏子の本性明浄と諸法本浄とは何れも心性本浄の思想のつながりに於て仏性思想の内在性を推測することが可能である。しかしながら、一乗の内容として示された之等の語は、その用語のみについて言えば法華經だけに限られたものではなく、他經典にも用いられている。之は仏子についても言えるのであるが、こゝで問題とすることは、この一乗が法華經においては諸仏の必要として述べられていることである。方便品に「この妙法(一乗)は諸仏の必要 (śāstya) 」であると記されている如く、原始法華經の時点に於て、既に一乗が祕説であつたことが明らかにされている。この事は一乗が単に声聞乘、辟支仏乘に対して相対的に並列されたものとして存在しているのではないと同時に、一乗の内容そのものに重要な意味が含まれていることを示すものである。此の必要たる一乗は、先づ方便品に於ては、仏の成就せるところの法(一乗)は第一の有希なる難解の法にして、唯、仏と仏とのみ能く究み尽し得るものである¹²⁾と述べ、部派教団等に於て展開されているが如き教理、概

念を以つてしては理解し會得することは出来ないと言張しているのである。であるからこそ、智慧第一の舍利弗を引き合ひに出して「たとえ十方に皆、舍利弗の如きもの満ちて思を尽して共に度量るとも、仏の智は測ること能はず」と述べている。そして、この難解の法(一乗)を説くならば世間の人々は皆、驚き疑うことが記されているのであるが、一乗の法を説く時、何故に驚疑、怨嫉を生ずるのか、という疑問が残される。しかしながら、此の一乗が新思想であり、その理念が「悉有仏性」であると見る時、かゝる驚疑、怨嫉についての記述は肯定され得るのではなからうか。

二乗作仏を説く法華經に於ては声聞、辟支仏、一切衆生に仏性を有するとする必然の帰結を考える事が出来るのであるが、悉有仏性の思想は当時としては理解の仕方如何によつては危険性をともなうものであり、又、伝統的比丘集團等の各教団からは批判、反対の表明がなされたのであろう事は想像に難くはない。こうした事情を經典では「此の經は是れ諸仏の必要の蔵なり、分布して妄りに人に授与すべからず」(方便品)「この法華經は諸仏如来の祕密の蔵なり、諸經の中に於て最もその上に在り、長夜に守護して妄りに宣説せず」(安樂行品)と述べている。これは法華經集團に於てその新思想を外に向つて宣説することなく、かなりの期間を過して来たという事実を示しているものであり、祕密の意味も法華

經が無上法であるが故に名づけられると言うのみではなく、実際にその思想を祕密裏に保持して来たという点に向けられてよいであろう。こうした新思想の表面化は種々の迫害を招くに至つた。即ち「此の經は如来の現在にすら猶、怨嫉多し、況んや滅度の後をや」(法師品)「諸の無智の人の悪口罵詈、及び刀杖を加ふる者あらんも我等は皆當に忍ぶべし」(勸持品)等と、未来の予言、誠めの形を以て述べられてはいるが、すべて法華經弘通當時に加えられた迫害、誹謗の事実を裏付けするものである。そこで、之等法華經における誹謗者として挙げられるのが、先づ方便品の「五千起去」である。こゝでは法華經に反対する立場の者としての在家集團と出家集團とを挙げているが、法師品に至ると、「若し菩薩ありて、是の法華經を聞き、驚疑、怖畏せば、當に知るべし、是れ新発意の菩薩と為すなり、若し声聞の人にして、是の經を聞きて驚疑し怖畏せば、當に知るべし、是れ増上慢の人と為すなり」と述べており、声聞人そして菩薩の中にも法華經に対する誹謗者が存在していたことを示している。即ち法華經の新思想に対して伝統的比丘集團、更には大乘教團の中からも反対の聲が挙げられた事実を物語るものである。彼等反対集團は此の諸の比丘等は利養を食らんが為の故に外道の論議を説き、自ら此の經典を作り、世間の人を誑惑し、名聞を求めんが為の故に分別して是の經を説く」「是れ邪見の人な

法華經における仏性思想の内存在(有賀)

り、外道の論議を説くなり」(勸持品)と示されている如く、法華一乘の思想に対して外道の論議、邪見であるという立場を取り、名利の為に經典を作り、世間の人を誑わすものと非難しているのである。法華一乘が「悉有仏性」の思想を有するものである時、恐らく、当時においては未だ曾つて聞くことのない思想であり、彼等にとつては驚疑、怖畏に値いするものであり、外道の論議としてうつり誹謗の方向へ進んで行つたといふことは考えられるのである。

大乘涅槃經は一切衆生の悉有仏性を説く經典であり、この經典の成立は仏性思想が一応定着したものと見て見ることが出来る。勿論、現行涅槃經は幾つかの段階を経て成立したものであるが、仏性思想が經典の中に表明されたという事は、悉有仏性の主張が思想として定着したことに所以するものであり、教理としてその存在価値を認められたものと考えられる。しかしながら、このように定着した時点においても、なお且つ仏性思想に反対する立場の人々が存在していたという事を認めざるを得ないのである。大般涅槃經卷第三六、迦葉菩薩品に「是の念を作し已りて便ち是の言を作す、是の涅槃經典は即ち外道の書なり、是れ仏經に非ず、と、是の人は余の時に善友を遠離し正法を聞かず、時に聞くことを得と雖も思惟する能はず」と記されている。これは「微妙の大涅槃河は其の中に亦七種の衆生有り」として挙げるうち、常没人(一

聞提)について述べる文から続くのであるが、悉有仏性を説く涅槃經を「外道の書なり」とする誹謗の点が注目される。之はまさに、法華一乗に対しての「外道の論議を説き、自ら此の經典を作り云云」という誹謗と其の軌を一にするものである。涅槃經の作成に当り、法華經の此の文をそのまま引用したものであるか否かは定かではないが、少くとも法華經に及びせられたと同様の誹謗が涅槃經にも及びせられたと考ええる事は可能である。又、涅槃經における仏性のあつかいと、法華經における一乗のあつかいにおける類似点を挙げるならば、大般涅槃經卷第八、如来性品には「善男子、所有の仏性は是の如く甚深にして知見を得難し、唯、仏みの能く知る。諸の声聞、縁覚の及ぶ所に非ず」「善男子、是の如きの仏性は唯、仏のみ能く知る。諸の声聞、縁覚の及ぶ所に非ず」と述べているのであるが、これは法華經方便品に「仏の成就せる所は第一の希有なる難解の法にして、唯、仏と仏とのみ乃ち能く究の尽す」「仏の得たる所の法は甚深にして解り難く言説せし所の意趣の知り難し、一切の声聞、辟支仏も及ぶこと能はざる所なり」と記されている点とその様相を一にするものであり、更に「信を以ての故に知る」(涅槃經)「当に大信力を生ずべし」(法華經)と、いづれも信解が要求されているところなどの共通する面を見出すことが出来る。勿論、般若經典等においても「是れ聖智の境にして自在甚深なり、声

聞独覚は測量すること能はず」という記述が見られ、大乘經典は少くとも此の立場を保有するものではあるが、法華經及び涅槃經は「唯仏与仏乃能究尽」「唯仏能知」といふ色彩を強く打ち出している点が共通して特徴をなしていると見ることが出来る。

すでに、法華一乗に新思想ありと推定し、それを仏性思想の内在と想定したのであるが法華經に示された誹謗の様相と涅槃經における類似の部分と比較する時、涅槃經が法華經の記述を無条件に引き継いだものとは考えられないのであり、やはり其処には理念の共通性(仏性思想の内在)それにとりなう誹謗の類似性、継続性のある事を物語るものとして見ることが出来る。大乘經典を通じて流れているものは悉皆成仏の主張(皆成思想)であると言える。しかしながら悉皆成仏の主張の全てに思想としての悉有仏性が成立していたとは言いが得ない。又、一乗も法華經だけに限られたものでもなく、その用語例は般若經典、華嚴經典等のそれ々々に見出すことが出来る。法華經に於ける皆成思想、一乗の思想が、他經典に於けるそれと全く同一内容、同一理念のものであるならば、他にはあまり見られない誹謗の記述は何の為のものであるか、やはり其処には他經典とは異つた理念、即ち悉有仏性の理念の内在を認めてもよいのではなからうか。

1	Saddh. Pun. p. 44.	2	"	p. 45.
3	"	4	"	p. 52.
5	"	6	"	p. 51.
7	"	8	"	p. 88~89.
9	"	10	"	p. 51.
11	"	12	大正九・一〇b。	p. 42.
13	大正九・五c。	14	大正九・六a。	
15	大正九・三一b。	16	大正九・三九a。	
17	大正九・三一b。	18	大正九・三六b。	
19	大正九・七a。	20	大正九・三一c。	
21	大正九・三六c。	22	大正一一・五七五a。	
23	大正一一・五七四c。	24	大正一一・四一二b。	
25	大正九・五b、六b。			
26	大般若波羅蜜多經卷第五六九、法性品第六(國訳一切・般若五・P二四七)、勝天王般若波羅蜜經卷第三、法性品第五(大正八・七〇二a)			
27	般若經典 大正五・三八c、大正七・八二五b、九〇〇b、九二八a、大正八・八五c、六四〇b、六五八a、七三八a。晋訳華嚴 大正九・四二〇b、四二九b、五五五c、六三六c、七三八c。唐訳華嚴 大正一〇・六〇a、二四六b。			

法華一乘に仏性思想が内在すると見る時、この仏性思想は、譬喩品に於ては舍利弗の授記として示されて来る。二乗授記について論議されて来ているが、仏性思想の内在という立場から見ることも今後の課題としてよいではなからうか。

法華經における仏性思想の内在性(有賀)

執筆者紹介(五)

- 春日 札智 (元大谷大学教授)
- 櫻尾 慈覚 (大阪大学大学院)
- 森 祖道 (城西大学助教授)
- 平井 宥慶 (大正大学大学院)
- 高崎 正芳 (花園大学助教授)
- 伊藤 瑞叡 (立正大学講師)
- 葉 阿月 (台湾大学講師)
- 海野 孝憲 (名城大学講師)
- 田中 孝海 (京都学園大学勤務)
- 齋藤 昭俊 (大正大学助教授)
- 竹内 明 (仏教大学助手)
- 藤村 隆淳 (高野山大学大学院)
- 津田 真一 (東京大学大学院・Ph.D.(A.N.U))
- 定方 晟 (東海大学講師)
- 湯山 明 (オーストラリア国立大学講師)
- 秋山 達子 (駒沢大学講師)
- 花山 勝友 (武蔵野女子大学助教授・文博)
- 袴谷 憲昭 (東京大学大学院)
- 本多 恵 (寺院住職)
- D.S.ルエッグ (ライデン大学教授)